422.4.21(水)

中國新聞 2010年（平成

子の髄膜炎予防 助成を

任意ワクチン 最高で8万円

子どもの細菌性髄膜炎を予防する2種類のワクチンが今年出そろった。死亡することもある病気だが、ワクチンは任意接種のため、費用が高いのが難点。公費助成を求める声が高まっており、費用の一部や全部を自治体が負担する動きもある。

細菌性髄膜炎は、脳や脊髄（せきずい）を包む髄膜やその中を満たす髄液に、血液などを介して細菌が入り、増殖することで起こる。

原因菌で最も多いのはインフルエンザ菌b型（略称Hib＝ヒブ）で次が肺炎球菌。のどや鼻にいるありふれた細菌だ。

国内の患者は推定で年間約千人で、多くは5歳までの乳幼児だ。死亡率は5％前後、1～2割に発達障害など重い後遺症がみられる。

「中枢神経系の周りで細菌が増える、すごく怖い病気だ」と国立病院機構三重病院の小児科医師、中野貴司さん。「抗生物質をたくさん使って治療しなければならず、入院期間も長くなる。予防が一番大切です」

予防のためのワクチンとして、まずヒブワクチンが2008年12月に発売され、今年2月には小児用肺炎球菌ワクチンが発売された。中野さんによると、この2種類で、細菌性髄膜炎の8～9割を予防できるという。

ヒブワクチンも肺炎球菌ワクチンも生後2カ月～6カ月で接種を始め、計4回打つのが標準。それよりも遅く始めた場合は接種回数が減る。

ヒブワクチンは標準的には4～8週おきに3回打ち、3回目の1年後に4回目を打つ。生後7カ月～1歳未満に接種を始めたら3回、1～4歳で始めたら1回打つ。5歳以上は接種不要だ。

肺炎球菌ワクチンは標準的には27日以上の間隔で3回、生後12カ月～15カ月に4回目を打つ。7カ月～1歳未満に始めた場合、接種は3回、1歳で始めたら2回、2～9歳なら1回のみ。

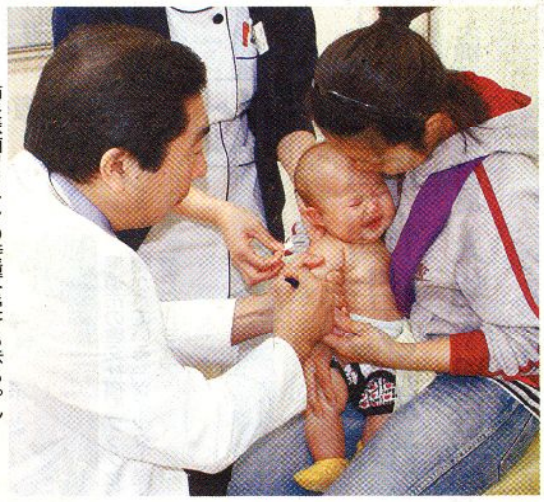
どちらも任意接種のため有料で、ヒブワクチンが1回7千～9千円、肺炎球菌ワクチンは1回9千～1万円。標準的な4回接種で両方とも打つと、最高8万円近くかかることになる。

東京都医師会・感染症対策委員長で小児科医の和田紀之さんによると、費用が高いため接種をあきらめたり、回数を減らそうと接種時期を遅らせたりする保護者もいる。

「抗生物質の効きにくいインフルエンザ菌や肺炎球菌が増えているが、そうした菌に対してもワクチンは有効だ。生後2カ月になったら早めに接種してほしい」

和田さんは「費用を補助し誰でも受けられるようにしないと、せっかくのワクチンが広がらない」と政府による定期接種化の必要性も指摘する。

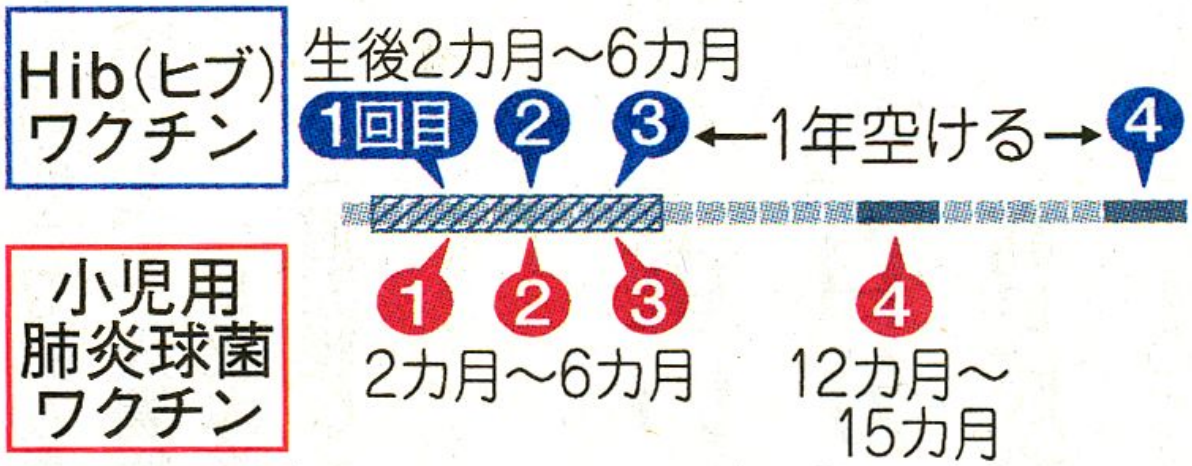
費用助成に乗り出す自治体も出てきた。北海道幌加内町は昨年、任意接種の水ぼうそう、おたふくかぜのワクチンとともにヒブワクチンの全額助成を始め、4月からは肺炎球菌ワクチンの全額助成も開始。同町保健福祉課は「子どもたちは町にとって大事な財産。重い後遺症や死から守らねばならない」としている。



肺炎球菌ワクチンの接種を受ける赤ちゃん（東京都足立区の和田小児科医院）

接種控える保護者も

自治体に支援の動き

細菌性髄膜炎予防のための標準的なワクチン接種時期

細菌性髄膜炎予防のための標準的なワクチン接種時期